

カーテン越しに朝の白い光が差し込む自分の部屋で藤井夢心は目を覚ました。恐る恐る目を開けて見えたのは、いつもの見慣れた白いクロス張りの天井に白いかさの付いた照明器具。

「……夢、だったんだ。そうだよね。夢だよね」

一人、つぶやいて夢心はからだを起こした。気付けば、酷く汗をかいている。そうだ。

思い出して夢心は自分の右手、薬指を確かめる。

こんなに意識して自分の薬指を見るのは初めてだった。

「もうちょっと、ほっそりしたら良かったのに」

まるで男の子の指のように、ごっごっして、とても女の子の指には見えなかった。

夢心はベッドから起きて、自分の部屋から階段を降りて浴室に向かった。汗でびっしりになったTシャツを脱いで洗濯籠に放り込んで、頭から熱いシャワーを浴びた。

そして、シャワーの音に呼び起こされるように、あの声が夢心の脳裏に蘇る。

——私は咲弥姫。私はあなたの記憶の中に存在する。

「えっ？ なに？」

声のありかを探して、夢心はきよろきよろと辺りを見回した。

——総ての生命いのちの記憶は光となって時の回廊を渡り、新たな生命の中に受け継がれる。時の流れは清く、総ての命を浄化する。けれど、いま時はゆがめられ、受け継がれるべき真実は隠され、失われ、清らかだった流れは濁ってしまった。

「だれ？ どこにいるの？」

見渡す空間は乳白色の薄いベールが幾重にも折り重なって雲のようになっていて、空間全体が淡い光に包まれていた。その中を青や白、時に黄色や赤色、あらゆる色の小さな光が螺旋を描きながら無数に飛び交っている。肝心の声の主の姿はどこにも見えない。——あなたは選ばれし人。時を繋ぎ、人を繋ぐ。ゆがんだ時の中から真実を見出す勇氣と力を持っている。

自分の真後ろから声が聞こえたような気がして、振り向いた夢心の手元近くから、ぼろりと指輪が現れて、夢心の右手、薬指にするりと収まった。

「なに？ なにこれ？」

——それはオブシディアン。悪しきを払い、良きものを呼び寄せる。あなたを導き、護る石。

薬指に収まって光を放つ指輪を夢心は必死に抜き取ろうとするが、まるで、はじめからそこにあっただかのように指輪はびくともしない。

——私は咲弥姫。あなたの記憶の中に存在する。あなたの想いは、私の想い。あなたの想いは時を繋ぎ、人を繋ぐ。躊躇ためらわないうで、前へ。

頭上から流れ落ちるシャワーの湯気の中に夢心は自分の右手をかざした。指輪の姿はどこにも見えない。

「夢だもん。あるわけないよ」

自分を納得させるようにつぶやいてみたが、どうしても、そこにオブシディアンの指輪があるという感覚を捨てきれない。

きゅっと、夢心はシャワーの栓を閉じた。

ぼたぼたと髪からこぼれ落ちる水滴が朝の光を飛び散らせて、夢の中で見たような無数の光を放っていた。

「咲弥姫って、言ってた」

夢心は記憶を探る。

このはなさくやひめ
此花咲弥姫。

大山津見を父に持ち、姉の岩永姫と一緒に瓊瓊杵尊にぎぎのみことに嫁いで、海幸彦と山幸彦うみさちひこを産んで、死んでしまった伝説の姫、だったはず。

「そんな人が、なんであたしに……」

そもそも実在したかどうかとも分からない、そんな伝説上の姫がなぜ、突如として自分の夢に出てくるのか、それも本当に夢だったのさえ、判断が付かなかった。

着替えを済ませた夢心は、八幡神社の隣にある喫茶店、蟠桃堂まで自転車を走らせた。蟠桃堂は、夢心の幼なじみ、天海萌の父、天海珀が脱サラして始めた喫茶店で、自宅の一部、道路に面した部屋を改装してお店にして、奥はそのまま自宅として使っていた。天海の淹れる珈琲は美味しいと評判で、常連客も多い。昨年までは天海の奥さんが作る自家製のケーキがお目当ての客も多かったが、いまは近くのケーキ屋さんから配達してもらっている。軽食メニューで圧倒的人気を誇っているのが、不定期にメニューに加わるカレーだった。スパイスが効いたカレーは、さっぱりとした辛さが人気の秘密だった。

両親が学校の先生で帰りが遅かったため、蟠桃堂と家が近所だった夢心は、小学校に上がる前から天海家に入入りして、一日中、萌と遊んでいた。夢心は萌を姉のように慕い、萌は夢心を妹のように可愛がった。

二人のもっぱらの遊び場は八幡様の境内で、他に何人かの子を加えて、鬼ごっこをしたり、だるまさんがころんだ、かごめかごめをして遊んだ。境内には、大きな銀杏の木が二本あって、秋になって葉が鮮やかな黄色に色づくつと沢山の銀杏が採れた。

中学の頃からときどき萌と一緒に店の手伝いをしていたが、高校に入ってから正式にアルバイトとして採用されて、ほぼ毎日、平日は学校が終わってから、土日は午前十一時の開店から、午後七時の閉店まで働いていた。

土曜日の朝、開店時間にはずいぶん早い時間に、夢心は蟠桃堂の隣にある八幡神社に向かった。

朝早い神社は、境内の空気もまだ完全に起きてないなくて、人影もまばら。しゃりしゃりと玉砂利を踏む足音が自分をも浄化して、神様がちゃんと自分だけを見ていてくれる、そんな気が夢心はしていた。

ふと、誰かに見られている、そんな視線を感じて辺りを見渡してみたが、そこに人影はなく、朱色の鳥居にとまった一羽のカラスが夢心を見下ろしていた。

「おはよ。そこで何してるのかな？」

声を掛けられたのが分かったのか、あるいは夢心の視線を嫌ったのか、カラスはついと向きを変え、翼を拡げて鳥居の向こう側のゴミ置き場に舞い降りて、何かご馳走はないかと探し始めた。

「悪いことしちゃダメよ」

言い残して八幡様の本殿に向かった夢心は、財布から小銭を取り出して賽銭箱に投げ入れる。カラカラと乾いた音を立てて賽銭が箱の中に吸い込まれて、ガチャリと、すでにずいぶん貯まっている感じのお賽銭の上に落ちる音がした。

夢心の手には少し太い紐を引っ張りながら、二度、三度揺らしてガラガラを鳴らす。さて。

背筋を伸ばして夢心は本殿の奥を見据える。

正面には大きな丸い鏡がある。夢心はこの鏡が苦手だ。鏡に目線を合わせると、どこか遠い世界に吸い込まれそうになってしまう。だから、いつも視界の片隅に入れるだけにしておく。

柏手を打って、両手を合わせた夢心は静かに眼を閉じて祈る。

今日も無事で、いい日でありますように。

お祈りの言葉はいつも同じ。平凡でいい。何事もなく一日が過ぎることがどんなに奇跡的で有り難いことなのか、夢心は去年、思い知らされていた。